



今年元旦妙光寺大広間にて 撮影提供：伊藤隆英さん

まきぐち 信徒の楨口さん夫妻

新潟市西区

楨口一則さん(76歳) 幸子さん(72歳)

楨口さんは、妙光寺と同じ日蓮宗の蓮久寺様(新潟市西区)の檀家です。3年前からは3名いる蓮久寺様の檀家総代のひとりを選ばれています。一方で信徒として30年余り前から、夫婦揃って妙光寺への正月の年始参りを欠かしません。

今年1月には、10日間連続の妙光寺『浄土講座・沙弥校』にも2人で参加されました。「ある程度お経は読めるけど、その内容を知りたかったのです。都合で3日間しか参加できませんでした。それでも分かりやすい解説で、時々話が脱線したり、歴史の説明があったりしてとても面白かったので、次回の11月には全日程参加するつもりです」とそろって答えてくれました。

蓮久寺様は今から345年ほど前、妙光寺の第26世霊鷲院日達上人が請われて現在地の西区高山に開かれたお寺です。昔は妙光寺を本寺とする末寺の関係でしたが、現在そのような言い方はしません。ただごく一部の古い檀家さんは妙光寺の信徒として、楨口さんのように正月等のお参りに来られます。一則さんは古くからある農家の16か17代目だそうですから、楨口家の妙光寺信徒歴は300年以上かもしれません。

妙の光

復刊133号

(2ページに続く)



行事案内



お彼岸中日法要

9月23日(火)

10時30分 安穩廟法要
11時 秋季彼岸会中日法要(本堂)
12時 おとし
13時 住職法話



『日々の祈り』展

10月22日(水)～26日(日)

中野亘陶展 齋木三男リトルブッダ石仏展

陶芸家、中野亘さんの陶器と、石工・齋木三男さんの石仏リトルブッダを展示します。販売もあります。

※25,26日には齋木さんが皆さんの前で石仏を彫る「公開作業」もあります。

お会式

『日蓮聖人744遠忌』 『第23回法号授与式』

10月26日(日)

9時 法号授与者研修
11時 お会式、法号授与式
12時 おとし
13時半 浄土講座
荻輪顕量先生



●報恩料 お一人3千円(含 おとし料他)

※詳細は別紙案内をご覧のうえ、同封のハガキでお申し込みください。

第16回浄土講座

『仏教の伝えた瞑想とお題目』

10月26日(日)13:30～15:00

●講師：荻輪顕量先生

(立正大学仏教学部教授/東京大学大学院人文社会系研究科名誉教授)

■参加費500円

(午前中のお会式から参加の方は不要です)

あとがき

今夏は常勤してくれるお上人が不在の初めての夏で、お寺は大変に忙しく原稿も文字通り合間を縫って書きました。秋から冬にかけては、行事が盛りだくさんです。石工・齋木三男さんが、妙光寺を支える新メンバーとして登場しました。インタビューで人柄に触れ、お会式では作品に触れてください。豊作の秋になりますように。(新倉理恵子)

第17回浄土講座(沙弥校)

『お経練習と基礎的な仏教の教え』

11月22日(土)、23日(日)、24日(月・祝)

●講師

松脇行真上人(鎌倉市圓久寺住職)

櫻井義秀上人(北海道大学名誉教授、特任教授)

小川良恵住職 小川英爾院首(妙光寺)



合同法事

12月7日(日)

今年、年回忌(法事)が当たっていたけれど都合でできなかったという方のために、合同の年回忌法要を営みます。檀信徒・安穩会員どなたでもお申し込みいただけます。

午後2時 受付

2時30分 法要

3時30分 銘々で墓参り

■費用:塔婆1霊位2千円・お供物共通経費2千円・お布施

■持物:位牌、墓参用の花、ロウソク、線香

※11月30日までに電話、FAX、メール等でお申し込みください。参列は平服でどうぞ。

月例ボランティア 毎月15日

●午前9時～11時半 午後1時～3時

堂内や境内の清掃等をお願いしています。都合の良い時間にお越し下さい。昼食はご持参願います。

月例信行会(お経と寺ランチの会)

毎月第1水曜日 午前9時半～11時

●9月3日(水) ●10月1日(水) ●11月5日(水) ●12月3日(水)

お参り、瞑想、作務、精進カレーのランチタイムがあり、交流の輪も広がります。

■参加費 お志を各自賽銭箱にお願いします

■予約申込み不用。当日直接お寺へお越し下さい





西区 槇口一則さん・幸子さん



“外カフェ”での一則さんと幸子さん

信徒とは

妙光寺にはこうした歴史の古い信徒もいれば、安穩廟をご縁に信徒になられた方もおられます。いずれも他に菩提寺があるか、特定のお寺との繋がりの方です。菩提寺があれば亡くなられた際の葬儀はそちらに依頼するのが習わしです。妙光寺が一律に信徒の葬儀はお受けしません、というのはこうした理由です。

友人たち憩いの場

一則さんは家業の農業を両親と妻の幸子さんに任せて、73歳までガスの器具の販売会社に勤務してきました。会社で開いた料理教室で料理を

覚え、講師の作った料理で味覚を鍛えたことで料理が趣味になりました。

毎日の食事は大半をまかない、さらに時々ふたりそれぞれの趣味仲間などを招いて食事を振る舞うので、お宅は友人たちの憩いの場になっています。3年前の退職後に築100年の家を、同居する長男夫婦と自分たちの二世帯住宅に改修しました。「必要最低限の広さに慣れて、将来施設に入る練習をしています」と笑います。

長男夫婦が専業農家として米と特産の枝豆、さらには茄子、葱、冬菜など葉物類を作り、野菜は毎朝提携するスーパリーの店頭で搬入します。枝豆の収穫は毎日深夜1時からなので、他の多くの作業は槇口さん夫妻が手伝います。

一年を通して毎日多忙ですが、合間を縫って一則さんはソフトバレーボールの現役で全国大会にも出場し、幸子さんは谷川岳などへ出かける登山の趣味もありました。趣味の仲間たちに、採れたて新鮮野菜で料理を振る舞うのですから喜ばれる訳です。さらに山梨県にある日蓮宗総本山身延山への参拝は、30年間欠かしま

せんでした。以前は子どもたちも同行したのですが、やがて夫婦2人になり、今は高齢だからと長距離運転を長男に止められています。12年前の妙光寺開創700年身延山大法要には、幸子さんが同じ集落の信徒の人たち5軒で参加されました。

故・吉田キチさんが繋いだ縁

槇口さんは父の叔母にあたる吉田キチさんの影響が大きかったといえます。キチさんは、槇口家から同じ集落の吉田家に嫁ぎました。ところが吉田家は大きな農家だったため戦後の政策で農地の大半を没収され、さらに40代で働き盛りの夫を病で亡くしたので。キチさんは救いを求めて菩提寺や妙光寺始め近隣の日蓮宗寺院にお参りして、折れそうな心を支えました。そして戦後皆が苦しい中であつて、女手ひとつで家族を養ってきました。いつもにこやかで優しく、それでいて一本筋の通った気丈な女性でした。

末娘だったキチさんは歳の近い生家の一則さんを可愛がり、友達の伝手で嫁さんを見つけてきました。

それが幸子さんです。「同じ農家だから心配いらないよ」当時のキチさんの優しい言葉を、いまでも覚えているそうです。

キチさんは他家に嫁いだ2人の姉、さらに一則さんの母も誘ってはお寺参りを生涯続けました。幸子さんは「姑と一緒に農作業をしながら、仏様は大事だよ、お参りはしたほうがいいよと優しく教えられました。なので、いま蓮久寺様の行事参加は欠かしません」姑を懐かしむように話します。

これからの思い

自宅裏手には一則さん手作りの“外カフェ”があります。椅子に掛けると目の前に収穫中の茄子の畑、さらに田んぼ越しに遠く弥彦山と角田山が望めます。「ここで夕日を眺めながら2人で飲むお茶が、格別なんです」と幸子さん。一則さんは「元々ここでもお寺は気持ち安らぐので大好きです。昨年元旦の能登半島地震で、菩提寺である蓮久寺様の本堂内部が大きな被害を受けたままです。いま総代のひとりとしてその復興が気がかりです」と語られました。（院首記）



安穩

小川良恵

新メンバー「須利槃特」をよろしく

お盆のお参りお疲れさまでした

お盆には大勢の方にお参り頂き、ご苦勞様でした。御精霊も喜んでおられることと思います。また、一時は花立てが足りなくなるほどで、ご不便をおかけした方には申し訳ございません。来年までには花立てを増やす計画です。

須利槃特がやって来ました

さて、お盆に先駆けまして、妙光寺に新しいメンバーが加入しました。とはいっても、人間ではありません。見かけて気になっていた方ものではないでしょうか。三重塔池の水面に浮く落ち葉を回収するロボットです。見た目は水上のルンバを想像してください。元々はアメリカのプール掃除用だそう。院首さんが前々から欲しがっていたところ、ロサンゼルスに住む私の従姉妹が奉納してくれました。ソーラー発電で動くすぐれ者です。

新しい機械は皆大好きですね。「進水式をする」とはしゃいで、ロボットには「須利槃特」と名前をつけました。

「塵を払い、垢を除かん」

須利槃特は、仏典に登場するお釈迦様の弟子の一人です。兄とともに仏弟子となりましたが、優秀な兄と比べ、とても

愚鈍であつたとされています。3ヶ月が経つても、お経を少しも覚えることが出来ず、そばで読誦の声を聞いていた牧夫の方が先に誦んじられるようになり、牧夫に教えてもらうような状況でありました。見かねたお釈迦様は一本の箒を授けて、「塵を払い、垢を除かん」と唱えなさいと諭されました。須利槃特はそれから、毎日毎日「塵を払い、垢を除かん」と、念じ唱え、掃除を続けました。そうしてとうとう須利槃特は悟りを得た、というお話です。

「只一念の信ありて」

日蓮聖人は、『法華題目鈔』において「鈍根第一の須梨槃特は智慧もなく悟もなし。只一念の信ありて普明如来と成給ふ」と述べ、何よりも仏様を信じて直向きに修行することの大切さを説かれています。池で掃除を頑張る須利槃特を見た時には、そんなお話を思い出していただければ何よりです。

また、余談ですが、私はこの須利槃特を見た時に、『ジーマ・ブルー』というアニメーションを思い出しました。10分ほどの短編ですが、最後は号泣してしましました。ネットフリックスで配信しているので気になった方は是非見てみてください。

◆お盆の賑わい◆

例年の8月1日は施餓鬼法要と120件の墓経、昨年から加えた11日は新盆法要とお盆市と墓経、そして13日は墓地合同法要と歴代廟法要を行いました。お盆市は前夜から激しい雨が朝まで続き、急遽客殿廊下に出店。子どもたちの声が響き、冷房の効いた大広間では家族連れが抹茶を楽しみました。30日夜、300基の灯籠による精霊送りまで、1カ月にわたる長いお盆が続きました。



8月1日 お墓参り



8月11日 お抹茶のサービス



8月11日 賑わうお盆市



8月1日 施餓鬼法要



8月11日 新盆法要



8月30日 万灯のあかり 妙光寺の送り盆



8月13日 墓地合同供養



寺のうごき



◆マドハット・カケイ展◆ 7月1日～27日

イラクで生まれ現在スウェーデン国籍を持つマドハット・カケイさんの作品展示を、新潟絵屋と共同で行いました。1980年に起きたイラン・イラク戦争下での不安と恐怖が伝わる作品は、築300年を経た客殿に溶け込んだかのような不思議な空間を作り出しました。



◆沢水の濾過装置◆

手洗舎と池に山の沢から水を供給する濾過装置を自主制作しました。大型水槽は(株)アクアデザインアマン様の奉納、濾過材の素焼き玉を滋賀県の障がいを持つ方たちの施設「あいとう和楽」で制作、施設の寮で中野亘さんが焼いてくださいました。効果絶大ですが、今夏の日照りや、泥を伴った豪雨にはさすがにお手上げです。



◆海開き◆ 7月2日

例年の巻観光協会・海開きが角田浜海岸で行われ、出仕しました。



◆岩屋・七面様祭礼◆ 8月19日

法華經の守護神で妙光寺が発祥の地と伝わる『七面大天女』の祭礼。凜とした岩屋の霊気の中で読経が響き、無数の口ウソクの明かりが幻想的でした。



◆キツネノカミソリの大群落◆

今年もお盆過ぎに古墳登山道入口周辺で見事な群落が開花、10万本に1本?と言われる白い花も健在でした。



「菩薩の森」の菩薩像を彫る

妙光寺浄土化事業の最終段階となる「菩薩の森」計画が、今年いよいよ始動しました。

28体の菩薩像を彫ってくださるのは、群馬県を拠点に活動する齋木三男さんです。

齋木さんの作業場にうかがい、8割まで完成したという

1体目の菩薩像を拝見しながら、お話を聞きました。

Q なぜ石の仕事をしようと思ったんですか？

齋木 家業がもともと石材業で、曾祖父の代にはもう中之条で石屋をしていたそうです。今は長兄が社長で僕と甥と3人でやっています。僕は5人きょうだいの末っ子で、小さい時から皆が作業場で仕事をするのを見ていたので、大きくなったら僕もやるのかなと思っていました。高3の時に父が他界しまして、美術がもとと好きだったので、石の仕事をするなら墓石より彫刻の方がいいと思って、阿賀野市の師匠のところに弟子入りました。

Q 石の彫刻を仕事にする方は

阿賀野に大勢いらっしゃるんですか？

齋木 いいえ、「菩薩の森」の仕事をするはずだった漆山昌志さんと僕の師匠の2人だけでした。石の彫刻をやる人は、

全国的にも少数です。現代の石屋さんには、僕の家も含めて墓石が中心になってます。

Q 修業はいかがでしたか？

齋木 やはり大変でした。友達みんな大学進学して、楽しくやっている。30年前なので仕事も昔ながらの「見て覚えろ」という世界でした。家に帰ろうにも水原駅はあまりに遠いし、一応4年間の修業と1年間のお礼奉公で計5年のシステムでしたが、高校を出てすぐだったので石の仕事を覚える以上に社会勉強ができたことの方が大きかったかもしれません。

齋木 三男さんは石を削るのが

Q 仕事ですが、石を山から切ってくる方が最初にいるのですか？

齋木 そうです。山から掘り出したり切

り出したりする山石屋さんが出て、その後に我々加工する職人の仕事が始まります。発注されると、それに合った石を探します。石はとにかく大きくて重いので、昔は地場で採れた石を近くで加工していたと思うんですよ。でも現代では、世界中の石が日本に入ってきているので、何でも選べるようになっていきます。だけど僕自身は、なるべく国内の石を使いたいと思っています。

Q この28菩薩の1体目の菩薩像は、どの石ですか？

齋木 これは神奈川県真鶴で採れた「小松石」です。東の横綱といっているいい名石です。西の横綱は「庵治石」という四国で採れる名石です。今後は、妙光寺さんの場所をよく見に行つて、さらに合う石を使いたいと思っています。色とか風合



齋木三男さん

50歳。石工・石彫家。群馬県中之条町在住。18歳から、阿賀野市の石彫家・故加藤亮氏のもとで修業した。帰郷後手彫りの石彫を基本に、石仏からモニュメントまで制作してきた。中之条の霊山高山の300年前の観音群を修復し、県庁前の「ぐんまちゃん」像も制作。昨年個展「Little Buddhas」で小さな石仏のシリーズを発表。中之条ビエンナーレ実行委員長。ブルースとお酒が友達。

Q 名石…「いい石」というのは、どういう石ですか？

齋木 それは非常に難しい問題です。人間の立場からすれば、見た目の美しさと加工のしやすさですね。でも柔らかいと加工しやすいけれど、風化も早い。よく「粘りがある」という言い方をします。ミケランジェロのダビデ像の素材である大理石は、キリで穴が開くくらい柔らかいの粘りがあるから、緻密な指先まで細工しても欠けることはない。それで石の文化が繁栄しました。御影石ではあれだ

けのことはできません。日本では大理石があまり採れないので、石の文化も発達しなかったのでしょう。

Q 地球の歴史を考えると、石が崩れて土になつたわけですね？

齋木 土が固まって石になる場合もあります。石の成り立ちは様々ですが、基本的に土が圧縮されて石になります。気の遠くなるような何千万年、何億年の営みです。石はその時間軸が凄まじくて、木をはじめとする他のものと比べにくいんです。石の時間軸の長さが神々しく感じられて、日本人は岩にしめ縄を張って神様のようにしたりしたのでしょう。石をポンと割ると、そこは今まで全然空気に触れてなくて、割った時に初めて空気に触れる。最初は色が違うんですよ。すごく鮮やかな色で。それが空気に触れると

酸化して、ジワッと色が変わってきたりするんです。すごいですよ。だから「彫らせてもらう」という思いは絶対必要だと思っています。

Q もう直に自然と向き合っている感じがしますね？

齋木 切ってきた木は、生き物感がありますよね。だけど、石の方が凄まじいですよ。木は、自分の人生の中に木が入っている。10歳の時に植えて自分が死ぬ前にその木の寿命が終わるということもあるけど、石は絶対そんなことがないわけですから。石という素材は本当に、想像できないくらいすごい。その取り返しのつかない最初の一打を入れるときの気持ちね……。

Q 今回の28菩薩の仕事はいかがですか？

齋木 身が引き締まるということが第一です。こういう仕事は今までありませんでしたから。通常仏像は、お寺に1個建てたらそれで終わりです。だから28という大プロジェクトをやらせてもらうのは本当にありがたい。自分にも学びがあると思います。しかもそれが修業先だった新潟のお寺で、面識のあった漆山さんのご縁もある。びっくりしながらも感激しています。

Q この1体目の菩薩像は、漆山さんのデッサンを元にしたと聞きました。

齋木 漆山さんが残した図面が3、4体あって、最初はその図面をもとに作り、そこから先は僕が独自に制作することになります。

Q この仏像は、本当の人間に比べて左手が長いんですね？

齋木 膝くらいまでありますね。多くの仏像がそうなっています。衆生を救おうと手を差し伸べているとも言われますが、やっぱり短いとエレガントにならない。左手を下げると、肩も下がってきて全体がくねる。そうすると女性的な柔らかないフォルムができあがります。そういうバランスってちよつとのことなんですけど大きいんです。そういう今までの仏像の流れの中で、僕なりのいいなって感じたものを出していくことになると思います。

Q 28菩薩全体を統一する何かもあるんですか？

齋木 ご相談したんですけど、いろいろな形があった方がいいということになっています。道祖神みたいな形もあるかもしれません。変化に富んでいて「あそこ面白いよね」という風になつたらいいなと思います。それでいて、自然に統一性がにじみ出てくる方がいい。それに28菩薩の中には、名前と説明はあってもほとんど像に現されていないものもあるんですよ。だから「ここに来ないと会えない菩薩様」も作るようになります。そこは、これから考えていきたいと思っています。僕としても、この制作は一つの挑戦になります。

Q 石仏は100年以上残りますよね？

齋木 天災とかがなければ、もう千年とか持ちます。いいのかなあ、残っちゃうなあと思いますね。だから、手を合わせなくなるものを作りたい。数年がかりになります。みなさん待っておられると思うので、急ピッチで進めさせていただきます。今後は、石との出会いみたいなものもあります。「この石があった！」というインスピレーションで違う形が出てくるかもしれません。それから妙光寺では裏のお庭を今作っているから、この場所だったらこんなものがということもあるかもしれませんね

齋木さんの菩薩像に会つのが、本当に楽しみです。

(聴いた人・編集部 新倉理恵子)

制作途中の得大勢菩薩





Q 僧侶の方々は様々な色の衣を身に着けていますが、服装のきまりはあるのですか？



僧侶が身に着ける衣には、主に袈裟と法衣があります。この2つに、帽子や袴等の附装をあわせて法服（衣帯）といいます。いつどのような衣を身に着けるかは、各宗派ごとに『法服規程』という決まりで定められています。

袈裟は、サンスクリット語の「カシャーシャ」を音写した言葉で、“濁った色”という意味です。仏教の生まれたインドでは、僧侶は財産を持つことが出来ず、捨てられた端切れや寄付された布地を縫ぎ合わせて、衣としていたことが由来です。袈裟は大きさによって、五条から二十五条までがありますが、日々の法務で用いるのは五条と七条です。また、タスキ型のものは折五条といって、動きやすさ

を重視して文字通り折りたたんだ五条です。

法衣は袈裟の下に着る僧服のことで、直綴・素絹・道服・布教服などがあります。このうち直綴は正式な法衣という意味で、本衣ともいいます。本衣は僧階（お坊さんの位）に応じてさまざまな色が配当されているところから、色衣ともいわれます。直綴以外の法衣は黒色を身に着けることがほとんどです。宗派によって違いはありますが、日蓮宗では深紫または緋色の法衣に緋紋白の袈裟が、最高位である大僧正の法服とされています。

なお、原則としてお坊さんは自身の僧階で定められた色の法服を身に着けますが、大きな法要の際には、周囲と色をあわせるなどの配慮もされています。



誌上法話 小川良恵

此経難持 若暫持者 我即歡喜 『宝塔偈』

法要中、お題目をお唱えした後に、
「此経難持 若暫持者……」とリズムのついたお経を聞いたことがあるかと思います。
檀信徒の皆さんの中には、リズムに合わせて団扇太鼓を叩く方もいらっしゃいます。
このお経を「宝塔偈」といいます。

「宝塔偈」はお釈迦様の呼びかけ

「宝塔偈」は、『見宝塔品第十一』に著された偈文です。偈文というのは、一定のリズムをもった詩のような文章のことで、韻文ともいえます。

お釈迦様が法華経を説かれた直後に、地面から湧き出た宝塔の中から多宝如来が現れ、説かれた教えが真実であると宣言をします。多宝如来はまた、お釈迦様のために座る場所をあけて、二尊は宝塔の中に並座しました。このとき、お釈迦様は「自分は遠からず完全な涅槃に入る」——つまり私たちの生きる娑婆世界を去らねばならないことを告げ、代わりに法華経を広めてくれる者はいないかと、説法の場集った者たちに呼びかけました。この呼びかけが宝塔偈の内容です。

仏の教えを実践するものは「世間之眼」

現代語訳でまとめるならば、「このお経を信じて実践し続けることはとても困難ですが、たとえ一瞬であろうとも信仰して行動する者がいるならば、その人はお釈迦様をはじめ、多くの仏様に褒められるでしょう。

う。その人は勇気があり、努力家であり誰よりもはやく成仏できるでしょう。未来世において、法華経を一途に信じて読み、記憶する者は、真の仏子であり、心安らかな境地に至るでしょう。お釈迦様が完全な涅槃に入った後、恐怖が支配する時代にあったとしても、教えの意味を理解できている者は、神々や生きとし生ける者の眼となるに違いありません。そして全ての者たちから尊敬を得るでしょう。」となるでしょうか。

団扇太鼓のリズムにのせて

「宝塔偈」は独特のリズムをつけてお読みします。このリズムの由来は、伊豆流罪に遭われた日蓮聖人が、船の上から弟子たちに向かってお唱えした、その波の揺れだったそうです。

法華経を信じ続けることが困難である理由は、真実を説くものは迫害を受けるためです。日蓮聖人もまた流罪という法難に遭いました。「苦しい中でも、決して諦めることなく法華経を多くの人々に伝え続けよう」——そんな日蓮聖人と弟子たちの祈りが、そのリズムに込められているのでしょう。

*団扇太鼓を叩いてみたいという方は、是非お寺にお声がけください。ほんの少し練習すれば、どなたでも叩けます。



秋の行事が盛りだくさんです。詳しくは別紙案内をご覧ください。

一日団体参拝 10月4日(土)

締め切りは過ぎましたが、欠員の出る場合があります。貸し切りバス料金は中型も大型も大差ありません。今回は参加費を極力抑えるために大型バスを用意しました。ご希望の方は今からでもお問い合わせください。

お会式 10月26日(日)

馴染みが薄いかも知れませんが、日蓮聖人を身近に感じる良い機会ですので、是非ご参加ください。参加費3千円(昼食、記念お供物、午後の講座参加費全て込み)を当日受付でお願いします。準備の都合で事前予約制です。

生前法号(戒名)授与式

年に一度の機会です。数珠の持ち方、お題目の意味等簡単な研修もあります。お問合せはお早めをお願いします。



開眼を待つ弥勒菩薩

第16回浄土講座

『仏教の伝えた瞑想とお題目』

国内外で瞑想がブームです。心を落ち着け、正しいものの見方、考え方を『法華経』に基づいて第一人者の箕輪顕量先生が易しくご指導くださる大変貴重な機会です。

『菩薩の森』第1期開眼法要

『菩薩の森』の菩薩像5体の開眼を行います。安置する森の植栽も完成

予定です。記念すべき第1回目、是非ご臨席ください。

齋木三男

『石彫実演とリトルブツ展』

『菩薩の森』の菩薩像を制作中の齋木さんが、野外で石像を彫る作業を2日間限定で公開します。また期間中に小さな石仏約50点を客殿で展示、販売もあります。海外でも評価が高まっています。この機会に是非ご覧下さい。



中野亘『陶展』

恒例になった新潟市出身で滋賀県に窯を持つ陶芸家・中野亘さんの作品展示です。新潟県内にファンが多く、毎年多くの方が楽しみにしています。

第17回浄土講座(沙弥校)

『お経練習と基礎的な仏教の教え』

11月22日・23日・24日(祝)
易しいお経の話と実習。1月に開催して好評につき2回目です。どなたでも気軽に参加いただけます。ご予約ください。

A 着火しなかった線香



B 紙を巻いて芯にしたろうソク



お墓参りのルールにご協力ください

線香は燃え尽きるように

皆様のお墓参り後の枯れた花やロウソク、線香の残滓は寺で回収し、事業ゴミとして有料でゴミ回収業者に処分を依頼しています。線香は燃え尽きていればその分が減量となります。線香は巻いてある紙を全て剥ぎ取れば、燃え尽きます。紙を巻いたままでは着火せず、紙が残っているとそこで消

えて燃え残りとなります。写真A

ろうソクは先の芯まで和紙を巻いて糊で止めて着火すると、紙が芯になって風で消えません。写真B
ろうソクは灯っている途中でも、必ず消してお帰りください。

お供え物はお持ち帰りください

お供え物が残ったままだと野生動物が食い散らかし、缶の飲み物は風で飛んで中身が墓石を汚します。お供え物はお参り後、お持ち帰り願います。

ステンレス花立は安穩廟専用です。

現在、墓地の水屋には常時『ステンレス製花立』の用意があります。従来型墓地の方は各自の墓に花立があり、この『ステンレス製花立』は安穩廟参拝の方専用です。従来型墓地の方が使用されると、回収して洗浄する手間が増えます。またお彼岸やお盆には普段より多く用意しますが、不足しかねません。

安穩廟参拝者以上の数を用意することは、保管上も経費上も困難です。従来型墓地用花立をご希望の方は、ご相談いただければ石材店におつなぎします。ご理解とご協力をお願い致します。

『任意後見制度』ご相談

高齢になって頼れる親族が近くにいないという不安をお持ちの方に、『任意後見制度』の利用をお奨めいたします。病氣入院や施設入所となると身元保証人を求められる場合があります。法律上は不要なのですが、病院や施設としては致し方ない場合があります。こうした弱みにつけ込んだ怪しい身元保証人ビジネスも横行して

います。

妙光寺では一般社団法人『生支縁』と協働して安心の老後が過ごせるようお手伝いしています。先頃は一人っ子が急逝されたご夫妻の遺言書を書くお手伝いをしました。費用は無料でした。子供がいないご夫婦に、遺言書は不可欠です。

「自分はまだ早い」と考えがちです。しかし先のことはいつ何が起こるか分らないのが人生です。認知症と診断されてからでは間に合いません。判断能力のしつかりしているうちに、理解して手続きしていただくことをお奨めします。

任意後見相談コーナーは日程の都合で年内の開催がありません。「生支縁」へのご相談は直接妙光寺へお問合せください。

年会費等口座引落し

10月27日に口座引落しさせていただきましたので、通帳残高の確認をお願いいたします。通帳の記載で、領収書の発行に代えさせていただきます。ご了承ください。